

イスラエル, ハイファ市から「シャローム(こんにちは)」

著者	Igarashi Shin-ichi
雑誌名	材料
巻	47
号	10
ページ	1095-1096
発行年	1998-10-15
URL	http://hdl.handle.net/2297/3554

イスラエル、ハイファ市から「シャローム（こんにちは）」

五十嵐心一*

Shalom, 日本学術振興会特定国派遣研究者としてイスラエルに派遣され、昨年8月から1年間の予定でここ地中海に面した港町ハイファ市にありますテクニオン-イスラエル工科大学 (Technion-Israel Institute of Technology) に滞在しております。私のホスト教授は土木工学科の Arnon Bentur 先生 (写真 1) で、先生はテクニオンの副学長でもあります。先生とは以前にカナダ、バンクーバーにあります UBC の Mindess 先生のところでお世話になったとき、Bentur 先生もサバティカルで全く同期間 UBC に滞在しており共同研究を行ったときからのお付き合いです。現在では、多忙にもかかわらず毎週私のオフィスでの熱心な研究指導からアパートの世話にいたるまで、私の生活すべてにわたってお世話になりっぱなしといった感じです。イスラエルという日本では政情や治安面での不安な情報ばかりが報道されるのですが、実際に暮らしてみると、多くの観光客とまったく平穏な市民生活の中にごく一部の不安状況があるのかなといった程度で、危険を感じることは全くありません。日本ではあまり馴染みのないこの国で生活して感じたことを報告しながら、イスラエルという国に関心を持ってもらえればと思う次第です。

1. イスラエルの日常生活

イスラエルは地中海の東端に面し、レバノン、シリア、ヨルダンおよびエジプトに囲まれた人口が 500 万人弱、面積は四国より一回り大きい程度の小さな国です。気候が温暖で生活しやすい地域であることには違いないのですが、言葉と宗教の面から我々日本人には馴染むにはちょっと時間がかかります。ここはヘブライ語とアラビア語が公用語ですがどちらもまったく理解できない者にとっては慣れるまで大変です（ペレストロイカ以降ロシアから大量の移民が入ってきて現在は人口の 20% を占めるようで、アラビア語よりもロシア語ができれば生活には困りません）。街を歩いていてもその店が何屋なのか、スーパーで物を買うにもそれがチーズなのかマーガリンなのか等商品の区別がすぐにはできません。商品すべてにきちんと値札がついているわけではなく、渡されるレシートも何がなんやらまったく読めないのに値段の確認もできないといった状況です。公共料金の請求書、領収書から銀行のキャッシングマシンの画面指示、大学での講義、掲示等すべてが当然のことながらヘブライ語で、また市中でも英語は思ったほどは通じません。こういう状況で生活してみて初めて日本で生活している外国人の不便さが実感できたような気がしました。また、生活の規範にユダヤ教が深く入り込んでおり、安息日や食餌規則、宗教に基づく行事、祝日が一般の人々にも受け入れられて、旧約聖書の時代から営々と続く自分たちの民族性を大切にしている国でもあります。迅速なサービス、24hours a day, 7days a week に慣れた身には不便さを感じざるをえませんが、慣れてくると逆にそういう生活を見てやろうという気持ちも生まれてきます。もちろんそのような宗教と国民一般の生活（および政治）が完全に分離していないことが問題であると感じている人も多数いますが、そういうことを話しているとだんだんこの国の歴史の複雑な事情がからんできて、結局は「我々にはどうしようもないのさ」ということになってしまうようです。いずれにせよ、先進国と同じ文明生活が特異な歴史を持つ民族の固有の文化と共

* 金沢大学工学部土木建設工学科 〒920-8667 金沢市小立野 2-40-20

存しているわけで、異国人からみたら非常に興味深い生活がここにはあるといえます。

2. テクニオンーイスラエル工科大学

テクニオンーイスラエル工科大学は 1924 年創立の国内唯一の理工系総合大学です。イスラエルはつい先日建国 50 周年を祝いましたが（写真 2）、テクニオンはこの国の建国以前から存在していたことになり、ちなみにあのアインシュタイン博士が名誉博士号を授与されるとともに、大学創立時の初代後援会会長を務めています。工学系のほかに、ハイファの海岸沿いのダウタウン地区に医学部キャンパスも有しており、学生数は 11000 人、19 学科と 40 の研究所および施設があります。学部から大学院博士課程まで備えており、私の分野である土木工学においては、イスラエルで学位の取れる唯一の大学です。イスラエルのような小さな孤立した国で、限られた設備と人材を有効に活用していくという意味もあって、テクニオンは工科大学と国立の工業研究所が一体となった組織になっています。つまり設備を共有しながら大学は教育と研究、研究所は R&D と一般産業界へのコンサルティングなどを推し進めるという形をとっています。私のこちらでの身分は土木工学科の客員助教授ということになっているのですが、オフィスは土木工学科棟とは別の国立建設研究所内(National Building Research Institute)に与えられております。この建物には大学に所属する教官と研究所に所属する研究員、技師が同居しており、勤務時間から職務体系までお互いに異なります。しかし、毎週開催の研究発表会やゲスト講師によるセミナーなどは共同で開催してお互いに意見を交換したり共同研究を行うなど、必要な時には協力体制がとれるようになっていきます。また、研究レベルに関しては、私のイスラエル派遣が決まった時にも多くの人から「なぜ、イスラエルなの、研究は進んでいるの？」とよく聞かれたもので、実際私も Bentur 先生との個人的な関係から応募ただけで、そのことについては深く考えてはおりませんでした。こちらにきて他分野の先生とも知り合うようになり話を聞くと、テクニオンを含めイスラエルのいわゆる名門といわれる大学ではテニユアをとるのが非常に厳しく、国内での活動やヘブライ語で発表された論文は全くカウントされないそうです。そのため教官のほとんどは国外での学会活動やサバティカルを有効に利用した国外での研究生活などによって常に最先端の研究交流に努め、そして国際的な学術雑誌に論文を投稿し続けなければならないので、研究レベルは先進欧米諸国と全く同レベルにあるとあってよいとのことでした。大学内の実験設備は整っていますし、インターネット等情報伝達基盤も日本以上に整備されております。さらに国全体が「アメリカ志向」ですからここで世界から取り残されることは全くありえません。

イスラエルは一部の宗教に生きる人々とアラブ人を除いて徴兵制度をとっており、高校を修了すると男子は 3 年、女子は 2 年の兵役の義務があります。兵役を終えてすぐに大学に入学する学生もいますが、一般には除隊後数年、インドや極東などに放浪の旅に出て見聞をひろめてから大学に入学する学生も多いようです。このため、学部学生の平均年齢は日本などにくらべてかなり高く、学部を修了するとすでに結婚適齢期にあるため、そこからさらに修士、博士課程へと進学する学生は非常に限られてしまうそうです。したがって、先生によっては自分の大学院生を確保するのが容易ではないとっており、特に私の分野でもあるセメント系材料では土木工学科の中でも学生の集まりにくい研究室だといっておりました。いづこも学生の研究室の人気事情は似たようなものだと変に納得した次第です。やはりここイスラエルでもコンピューター関連の学科に人気があるようで、現在も新たなコンピューターサイエンスの学科建物の新築工事がキャンパス中央で進められており、またテクニオン全体も学生数の増大にともないどんどん拡充しています。

3.イスラエルへのお誘い

私のような大学関係者のみならず企業その他の研究機関の方々も国外留学，もしくは国際会議のついでに研究機関訪問といった機会があるのではと思います。今までその受入先や訪問先としては欧米の先進国を考えてきたことと思いますが，ここでイスラエルもその候補に加えてみてはいかがでしょうか。こちらの人は言います。「資源のないこの小さな国がこれからも生き延びていくには外国資本の積極的な投下が必要で，そのためにはピースプロセスのさらなる推進が必要だ。そしてその気運を盛り上げていくためにも，多くの外国人がここにきて我々の生活を知り，決して危険なテロの国ではないことを理解してほしい。」と。私はこの地の歴史に比べたらほんのまばたきの瞬間程度イスラエルを見る機会が与えられただけで，中東問題の本質を理解してはいないと思います。しかし，日本の生活をそのまま持ち込んだ生活よりも，ユダヤ教に基づいて日曜日から木曜日まで働き，金曜日夕方から土曜日の安息日や休日には4000年の歴史を象徴する多くの遺跡を巡っては昔どっかで習った世界史を思いだす。人ごみに疲れたら，南部の砂漠地帯や「死海」浮遊など雄大な自然を満喫しながら，そこに生きる遊牧民の昔と変わらぬ生活を垣間見る。そして気が向いたらお隣さんまでほんのちょっと足を伸ばして，エジプトのピラミッドやヨルダンのペトラ遺跡まで気ままに出かける。安息日の移動手段さえ確保すれば，決して退屈することはないでしょう。確かに，日本車はたくさん見かけても日本人はほとんどいないので（ハイファには私を含めて8人の日本人だそうです），助け合いや情報交換は期待できません。日本食も思うようにはなりません。しかし，イスラエルの人たちは外国人が来てくれることを歓迎し，ディアスポラ（離散の民）の名残でしょうか，祖国を離れて暮らす身を案じてくれて親身になって世話してくれます。この歴史的な国で日本とは全く異なる文化の中で生活をしながら，最先端の研究活動に勤しむというのは十分考慮に値する選択肢だと思うのですがいかがでしょうか？最後に，テクニオンのパンフレットの表紙にも載っているアインシュタイン博士の言葉を紹介し，この国の工業立国，技術立国への熱意を示して皆さんをお誘いしたいと思います。

" Israel can win the difficult battle of survival only by developing painstakingly the intelligence and expert knowledge of her young people in the field of technology. ", Albert Einstein, President of the first Technion Society

写真1 NBRI の材料系の先生方といっしょに（著者後方中央：Prof. Bentur 夫妻，中央最後列：Dr. Katz 夫妻，右側：Dr. Kovler 夫妻）

写真2 イスラエル建国 50 周年記念切手の一部（日本の杉原千畝，そしてアインシュタイン，カフカ等が含まれている）



